

自分の意見練る大切さ知る

高校の社会科の初回授業で、宮崎駿監督の映画「風立ちぬ」をめぐる新入生たちが議論しました。ゼロ戦を設計した主人公・堀越二郎に、戦争の責任があるか、無いか。活発に意見が交わされました。

自動車とゼロ戦の設計者の責任の違いや原爆を設計した科学者の責任など、議論百出。あるクラスでは、責任が「ある」「無い」「どちらとも言えない」が、3分の1ずつに分かれるという伯仲ぶりでした。

授業開きにどうしてこのテーマを選んだのでしょうか。

ほとんどの新入生は、社会科は人名や事柄を覚える暗記教科だと思って入学してきます。この授業は、高校の社会科の学びとはどう違うものかを伝えようとして

「正解」求めない はぐくむ

ているのです。

社会科に限らず授業では、教師から生徒に問いが投げかけられます。多くは「この答えは何ですか?」というものです。正解を答えられれば生徒はほっとしますが、間違えれば恥ずかしい思いをすることでしょう。

教師は、生徒の理解度を確かめながら進めるために「発問」を繰り返します。常に教師が正解を持っていて、生徒は知識の有無や理解度を試されます。

一方で、「これについてどう思いますか?」という問いもあります。「どう思うか」には、必ずしも正解があるわけではありませんが、子どもたちは「正解」があると受け取り、教師の期待する答えを探そうとがちです。そうすると、本来に自分が考えたことではなく、より

「得」になる答えを出すことに慣れてしまっています。

国際学習到達度調査(PISA)でも、この問題が指摘されています。答えが複数あるような問題や、自分自身の考えを述べる問題を、日本の生徒は苦手としているのです。

教室の外に出れば、いつも問題に正解があるとは限りません。むしろ正解がない、もしくはそう簡単には結論を出せない問題の方が多いでしょう。

堀越二郎に責任があるかどうか。年度初めに、結論などありえないテーマを取り上げた意味。それは、様々な意見に耳を傾けながら、自分自身の意見を練り上げていく営みが大事だということに気づいてもらうためです。そして自分たちは、正解のない世の中に生きていることを理解するための授業なのです。

(自由の森学園理事長

鬼沢真之)